

極域・寒冷域研究連絡会のご案内

極域・寒冷域研究連絡会より、1998年春季大会（東京）での開催内容のご案内を致します。

日時：1998年5月29日（大会3日目）17：00～19：00

場所：気象庁4階予報部会議室

1. 第38次南極観測報告

山内 恭（国立極地研究所），平沢尚彦（国立極地研究所），林 政彦（名古屋大学）

2. 一般討論「極域寒冷域におけるこれからの高層気象観測」(無人定常高層気象観測装置の開発と観測網の展開に向けて)

2-1 世界の高層気象観測の現状と気象学研究における要望

中村 尚（東京大学），浮田甚郎（地球フロンティア）

2-2 無人高層気象観測の可能性について

ラジオゾンデ 迫田優一（気象庁）
ウィンドプロファイラー

足立アホロ（気象研究所）

MST レーダー 堤 雅基（国立極地研究所）

南極における最近の無人超高層気象観測の進展

田口 真（国立極地研究所）

（講演者は一部予定）

3. 総合討論

前半は、この春に南極越冬観測から戻られた方々より、得られた観測の速報、昭和基地・ドームF基地な

どの越冬風景のスライドによる紹介なども交えながら、報告して頂きます。

後半は「極域・寒冷域におけるこれからの高層気象観測」と題して、討論を行います。近年ロシア及びカナダなどでは予算の削減等に伴い、これまで定常的に継続されてきた高層気象観測所が著しい減少傾向にあります。高層気象観測の減少に伴い、客観解析データの質の低下、数値予報精度の悪化、更には気候変動研究における基礎資料の不足などが懸念されます。また、南極大陸では沿岸部を除き定常高層気象観測点がほとんど存在しないため、南極域の大気循環場の実態は現在もよく分かっておりません。このような問題を踏まえて、極域・寒冷域における無人高層気象観測の可能性を模索することは、将来の気象学研究、更には地球変動研究において有意義であると考えられます。

極域・寒冷域研究連絡会ではこの問題を、これからの本会の重要なテーマのひとつとして掲げていきたいと考えております。

世話役：浮田甚郎（地球フロンティア）

中村 尚（東京大学理学部）

平沢尚彦（国立極地研究所）

高田久美子（国立環境研究所）

阿部彩子（東京大学気候システム研究センター）

本田明治（地球フロンティア）